

多摩川先人館

[先人No.4] 多摩川を愛した文学者

岡本かの子 おかもとかのこ (1889～1939)

多摩川のほとりで生まれ育ち、多摩川の小説を書き、生涯多摩川を愛した文学者岡本かの子ですが、その生涯は波瀾万丈なものでした。



岡本かの子

二子村での少女時代

岡本かの子は明治22(1889)年3月1日、旧二子村（現：川崎市高津区二子）で代々幕府や諸藩の御用達を生業としていた豪商の旧家、大貫家（大和屋）の長女カノとして、赤坂区青山南町の別邸で誕生しました。

腺病質の[*a]ため、二子の本宅で養父母に育てられたかの子は、源氏物語などの手ほどきを受け、村塾で漢文を習い、通っていた尋常小学校[*b]では短歌を詠むという、文学少女でした。



13歳の時、跡見女学校の交友会誌「汲泉（きゅうせん）」に短歌を発表、16歳になる頃には大貫野薔薇という雅号で「女子文壇」や「読売新聞文芸欄」などへ投稿をはじめたそうです。

この頃、東大生の兄雪之助[*1]が文学活動をはじめ、谷崎潤一郎[*2]らが家に入りやすくなって、かの子は影響をうけます。そして17歳の時、雪之助とともに与謝野晶子[*3]を訪ねて「新詩社」の同人となり、「明星」や「スバル」から新体詩や和歌を発表するようになりました。

一平との出会い

明治40（1907）年、かの子19歳の夏、父と共に信州沓掛（くつかけ：現在の中軽井沢）追分の油屋へ避暑に出かけました。そこで上野美術学校生の中井金三[*4]と親しくなり、その友人である岡本一平の存在を知ります。そして翌年、兄雪之助の下宿で2人は出会い、一平はかの子を熱烈に愛するようになるのです。

明治41(1908)年、一平は洪水の多摩川を渡り、血判状を添えて、かの子の両親に結婚を申し込みました。当時、二子にはまだ橋が架かっていませんでしたので、泳いで渡ったのでしょうか。

そしてついに明治43（1910）年、和田英作[*5]が媒酌をつとめ、2人は結婚しました。かの子21歳、一平24歳の時です。

結婚した翌明治44(1911)年2月26日、長男太郎[*6]が誕生し、アトリエ付きの住居も青山に構えます。一平は朝日新聞に入社して漫画の連載を始め、「漫画漫文」という独自のスタイルで一世を風靡し注目を集めます。しかし収入が増大した一平の放蕩が始まり、順風満帆に見えたかの子たちの生活には徐々に暗雲

がたち始めるのです。

家庭不和に加えて、明治45(1912)年に兄雪之助、翌年母アイが相次いで死亡、おおらかな性格だったかの子は神経衰弱に陥ります。

奇妙な同居生活

そんな時、かの子の崇拜者で早稲田大学生の堀切茂雄と恋に落ち、逢瀬を重ねるようになります。しかし、妹キンが茂雄の下宿にいるのを発見して激怒したかの子は、一平の了解のもと茂雄を同居させ、かの子、夫である一平、愛人の茂雄とのなんとも奇妙な同居生活が始まるのです。

大正2(1913)年、長女豊子を生まますが、産後の肥立ちなどが悪く入院、一時生死の境をさまよいます。そんな時豊子が死亡。翌年退院したかの子は、次男健二郎を生まますが、この健次郎も半年で死亡、さらには愛人茂雄も結核のため郷里へ帰り死亡してしまいます。2人は宗教に救いを求め、一平はこの頃、かの子に自分の一生を捧げることを決意したそうです。



岡本太郎美術館「母の塔」

大正12(1923)年、鎌倉に避暑していたかの子たちは、同宿の芥川龍之介[*7]と出会い交流を深めるようになります。しかしここで関東大震災にあい、一時島根県での避難生活を送ります。

約1年後、青山に戻ったかの子は、痔の手術のため慶応病院に入院し、ここで外科医新田亀三と再び恋に落ちるのです。

昭和4(1929)年、夫一平がロンドン軍縮会議に朝日新聞特派員としての渡欧する際、長男太郎、愛人新田、一平の書生と共に同行し、約4年間にわたってパリ、ベルリンと渡り歩きます。渡欧した時18歳だった長男太郎はパリに残り、そこでピカソの作品に衝撃を受け抽象芸術家を志したそうです。

小説家への転身

昭和7(1932)年3月、アメリカ経由で帰国したかの子は、立て続けに西欧紀行文を発表、更に一平の献身的な協力と川端康成[*8]らの指導を得て、念願だった小説家への転身をはかりました。鎌倉での芥川龍之介との出会いを小説にした「鶴は病みき」を発表後、ひたすら純文学の執筆に勢力を傾け、数年間に驚くべき量と質の作品を次々に発表するのです。その中の一冊が「生々流転(せいせいりてん)」で、多摩川を舞台に生家や周辺の人たちの姿を懐古して書いた代表作のひとつです。



二子橋近く「岡本かの子文

化碑"誇り"

かの子はロンドン滞在中と、父寅吉の通夜の2

回、脳貧血[*c]で倒れていましたが、昭和13(1938)年、油壺へ出かけ3回目の脳貧血に倒れます。その後自宅で静養しますが、翌昭和14(1939)年、病勢が急変して入院、ついに3月18日50歳のかの子は、一平と亀三に看取られ、激しく短い生涯を閉じました。

年号	西暦	月.日	年齢	略歴
明治22	1889	3.1	1	旧二子村（現：川崎市高津区二子）の旧家、大貫家に長女カノとして生まれる。
明治27	1896		7	尋常小学校に入学。この時初めて短歌を詠む。
明治35	1902		13	跡見女学校に入学。短歌を跡見女学校の交友会誌『汲泉』に発表。
明治38	1905		16	兄雪之助を通して谷崎潤一郎を知る。
明治39	1906		17	与謝野晶子に会って「新詩社」の同人となり、短歌を『明星』に発表。
明治43	1910		21	一平と結婚。
明治44	1911		22	長男太郎誕生。
大正2	1913		24	一平・堀切茂雄との同居生活が始まる。長女豊子誕生。
大正3	1914		25	長女豊子死亡。
大正4	1915		26	次男健二郎が誕生するが半年で死亡。
大正12	1923		34	鎌倉に避暑し、同宿の芥川龍之介と会う。関東大震災にあう。
大正13	1924		35	外科医新田亀三と恋に落ちる。
昭和4	1929		40	一平、新田、太郎らと共に渡欧。
昭和7	1932	3	43	帰国。たてつづけに西欧紀行文を発表。
昭和11	1936		47	芥川龍之介を題材とした「鶴は病みき」を文学界に発表。
昭和12	1937	3	48	「母子叙情」を文学界に発表。
		10		「金魚撩乱」を中央公論に発表。第三随筆集「女の立場」刊行。
昭和13	1938		49	「河明かり」「老妓抄」を中央公論に発表。第四創作集「やがて五月に」第五創作集「巴里祭」を刊行。油壺で脳貧血に倒れる。
昭和14	1939	3.18	50	病勢が急変し一平、新田に看取られ永眠。

現在、岡本かの子は、府中市の「多磨霊園」に眠っています。かの子は観音像の中に、夫一平は岡本太郎が制作した彫刻の中にそれぞれ並び、それを見つめるように建つ「やすらぎの像」の中に岡本太郎が眠っています。



「多磨霊園」にある3人の墓

そして、かの子が生まれ育った二子にはやはり岡本太郎制作の「岡本かの子文化碑"誇り"」が、川崎市岡本太郎美術館には、それと向かい合うように造られた「母の塔」が建っています。

*1 大貫 雪之助（おおぬき ゆきのすけ）

- ．．．かの子の兄。大貫家の長男。晶川と号し、谷崎潤一郎、和辻哲郎らと第二次の「新思潮」に名を連ねている。明治45(1912)年死亡。

*2 谷崎 潤一郎（たにざき じゅんいちろう）

- ．．．1886年7月24日～1965年7月30日。明治後期から戦後にかけて活動した小説家。日本を代表する小説家としての名声を確立し、ノーベル文学賞の候補とされただけではなく、昭和39(1964)年には日本人で初めて全米芸術院・米国文学芸術アカデミー名誉会員に選出された。

***3 与謝野 晶子 (よさの あきこ)**

- ．．． 1878年12月7日～1942年5月29日。明治時代から昭和時代にかけて活躍した作家、歌人。歌集「みだれ髪」や日露戦争の時に歌った「君死にたまふことなかれ」、「源氏物語」の現代語訳などが有名。

***4 中井 金三 (なかい きんぞう)**

- ．．． 1883～1969年。東京美術学校に入学し画家を志したが、家業が倒産したため断念。中学校の図画教諭として着任、生徒の前田寛治 (まえだかんじ) らに刺激を与えた。

***5 和田 英作 (わだ えいさく)**

- ．．． 1874年12月23日～1959年1月3日。洋画家。1932年東京美術学校校長に就任。昭和18(1943)年文化勲章受賞。

***6 岡本 太郎 (おかもと たろう)**

- ．．． 1911年2月26日～1996年1月7日。かの子の長男。芸術家。「芸術は爆発だ」などの名言を残した。平面・立体作品を数多く残り、文筆活動も精力的に行った。昭和45(1970)年大阪の万国博覧会のシンボル「太陽の塔」を作ったことでも知られる。

***7 芥川 龍之介 (あくたがわりゅうのすけ)**

- ．．． 1892年3月1日～1927年7月24日。「羅生門」などの著作で知られる小説家。1927年7月24日、田端の自室で服毒自殺して死亡。親友で文藝春秋社主の菊池寛が、新人文学賞「芥川賞」を設けた。

***8 川端 康成 (かわばた やすなり)**

- ．．． 1899年6月14日～1972年4月16日。小説家。明治43(1968)年に日本初のノーベル文学賞を受賞。代表作として「伊豆の踊子」「雪国」などがある。1972年4月16日、鎌倉の自宅で「岡本かの子全集」の推薦文を書いている途中、逗子市の別荘へ出かけガス自殺をした。

***a 腺病質 (せんびょうしつ)**

- ．．． 病気にかかりやすく病気が重くなりやすい小児の虚弱体質。

***b 尋常小学校 (じんじょうしょうがっこう)**

- ．．． 旧制の小学校で、初等普通教育を施した義務教育の学校。明治18(1886)年に初めて設置、満6歳で入学。修学年限は4年。明治40(1907)に6年。

***c 脳貧血 (のうひんけつ)**

- ．．． 種々の原因によって脳の血液量が減少して起こる疾患。顔面蒼白となり冷や汗をもよおし、倒れて失神状態となることもある。